

【夏の地貌季語の解説】

「風穴」（ふうけつ）

風穴を出て風弾む菌朶の上 大橋路風

松本から上高地への道筋に稲核集落がある。山峡であるが、松本藩時代から飛騨地域との物資流通の要の地にあたる。ここに「風穴」を持つ旧家がある。蚕の種や落葉松の種子、或いは苗木類などが風穴に入れられている。外気が三十三度の真夏でも、氷点下の真冬でも、風穴の中は十度。年中常温である。

風穴の多くは火山の溶岩流が固まる際にできたもの。表面が凝固し、溶岩流が流れ去った内部が空洞化したのである。富士山の風穴は万年氷柱が見られ名高い。

秋田の荻原映雫氏は秋田・青森県境近く国見山斜面にある矢立風穴を『あきた季語春秋』の夏に紹介している。全国各地域にはこのような風穴があり、味噌を貯蔵し、漬物を保存するなど古くから生活を支える役に立っているのである。冷涼な風穴が意識されるのは、夏である。

掲句は、風穴の当りのさりげない描写が巧み。ひんやりした風に隠花植物の菌朶が震えている。作者は秋田県出身。

「肝だめし」（きもだめし）

肝だめし入鹿の墳を廻りくと 赤羽学

「百物語」とは、夏の夜の納涼の一つ。怪談を聞き、怖さにひやんとするのが涼味気分なのである。百物語は、行灯に百本の灯心を用意し、怪談の一通が終わるごとに灯心を一本消し、最後の百本目が消されると真つ暗闇から化け物が出るしくみ。

肝だめしはもつと素朴で、それだけに怖い体験だ。体験談の一つ。旧制中学時代からの伝統と称し、昭和二十年代終わりの松本の新制高校には、通学地域別に郷友会があった。郷友会では夏休みに入る直前に、納涼のコンパをやった。一年生には深夜、一人ずつ村の共同墓地を廻って来る「肝だめし」が課せられた。墓地の中ではお化けが出た。菟弱に頬を撫でられる。豆腐を頭に被せられる。敗れ提灯のろくろ首が行く手を遮る。上級生の種や仕掛けに翻弄された。

百物語は『新日本大歳時記・夏』（講談社）ではじめて季語にされている。青年になるための通過儀礼に遊びが加わった「肝だめし」の類は各地に在るのではないか。注目したい。

掲句は、飛鳥の地の肝だめしであろうか。深夜、蘇我入鹿の首塚を廻って来たとき吹いているところ。おかしみがある。作者は岡山市在住。

出典：『ゆたかなる季語 こまやかな日本』宮坂 静生 著 岩波書店

『語りかける季語 ゆるやかな日本』宮坂 静生 著 岩波書店